

# 交通事故ゼロの目標を掲げ 考え得るあらゆる対策を実施

京都府宇治市

啓発紙の発行や公用車へのステッカー貼付、ドライブレコーダーの運用、講義と実技を交えた多彩な各種研修まで、宇治市役所では、考え得るあらゆる交通事故防止策を講じている。その背景や内容、効果を紹介する。

宇治市では、公用車による交通事故が年度当たり30件前後で高止まりしている状況を改善するため、平成16年度から職員の安全運転・事故防止策に本格的に取り組み始めた。

まず、各部署の正副安全運転管理者等で構成される「公用自動車安全運転推進委員会」（以下、委員会）を設置した。以後、委員会は年2〜3回開催され、1430人ほどの全職員に向け、これまでに以下のような対策を次々と打ち出してきた。

- ◆ 啓発紙「あんぜん運転」の発行
- ◆ 「安全運転通信」および「交通事故発生!!」の配信
- ◆ 無事故チャレンジ
- ◆ ドライブレコーダーの運用
- ◆ 安全運転ステッカーの公用車への貼付
- ◆ 各種安全運転研修

これらの対策に当たるのは、市長公室秘書広報課車両係だが、一部、人事課も担当する。

## 啓発紙の発行に加え 事故情報を逐次配信

「あんぜん運転」は、全庁掲示板にPDFがアップされ、各部署で印刷し回覧する啓発紙。A4判1枚の

両面に、直近の事故からピックアップした事例検証と、交通安全に関するトピックが掲載されている。昨年6月発行の第25号のトピックは、同月1日の改正道交法施行に伴う自転車に対する法規制の強化だった。ちなみに車両係管理分の公用車159台中、5台は電動自転車である。

「あんぜん運転」は16年度創刊で、委員会開催後発行されることになっており、昨年度には3回発行された。しかし委員会でもっとタイムリーな情報提供が必要」との意見が出たのを受け、昨年8月から「安全運転通信」も始まった。全庁掲示板に月1回、前月までの交通事故件数と車両係からのお知らせを配信するもので、第1号では、昨年4〜7月までの件数が掲載された。7月には9件の事故が発生しており、職員の間からは「こんなに事故が多いとは知らなかった」と驚きの声が上がったという。「9件というのは、職員側に過失のない事故も含めた数字ですが、事故は事故。多くの職員はどのくらい事故が起きているのかさえ知りません。まずはそこから安全運転に対する意識を向上させようということ」と語るのは、車両係長の

池内研介さんだ。

11月には、事故発生翌日、遅くとも数日後に、事故の概要とそれを踏まえた安全運転のポイントを掲載した「交通事故発生!!」の配信も開始。リアルタイムでの事故情報の共有と意識啓発を図っている。

無事故記録日数を記した看板を設置する「宇治市無事故チャレンジ」も、意識啓発を狙いとした取り組みの一つ。看板は車両係窓口の脇、職員が車両を借りる際、必ず目に入る位置に設置されている。25年度から始め、昨年度からは看板に交通安全スローガンも加え出発前に安全意識をより高める工夫をしている。この3月には、安全運転ステッカーの公用車への貼付も始まった。あらゆる機会をとらえ、さまざまな方法で意識啓発が図られているといえよう。

昨今、自治体での導入が進んでいるドライブレコーダーも昨年8月か



秘書広報課車両係長・池内研介さん



無事故チャレンジの看板。無事故記録の対象は、同市の公用車 315 台中、消防車、ごみ収集車等を除く、車両係管理分 159 台。

ら一部装着を始めた。一般にドライブレコーダーには危険運転抑止効果もあるとされているが、これまでに装着車 15 台中 1 台で事故が発生した。未装着車では 37 台中 6 台なので格段に少ない。期間が短いこと、母数が少ないことから即断はできないが、危険運転抑止効果も確かに期待できそうだ。今後、装着車を増やしていき、事故発生時の状況把握や事故原因の分析のほか、事故映像を研修に活用することも検討している。

## 講義と実技を交え 対象者別に細かい研修

各種安全運転研修は、新規採用職員、全職員、安全運転管理者等、事故経験者と、対象者により 4 つに大別される。

■対象…新規採用職員 安全運転についての講義と実技指導が、4 月上旬～8 月上旬にかけて実施される。

車両係職員が講師となり、講義の後、市役所駐車場で後進や縦列駐車などの指導をマンツーマンで行う。池内さんは、「最近の若者の『車離れ』による運転経験の少なさは深刻で、就職するまで運転したことのない人も多く、研修は欠かせません」という。

■対象…全職員 全職員対象の研修としては、①安全運転技術指導、②運転技能診断、③交通安全研修の 3 つが実施されている。

①は、新採用職員対象と同様の研修を年 1 回、希望者に対し実施するというもの。加えて実技指導の後に参加者をワゴン車に乗せ、市内の事故多発箇所を回るといふ。宇治市内は、住宅街に入ると狭く入り組んだ道が

多く、車同士のすれ違い時に電柱やガードレールに接触するなど軽微な事故が後を絶たない。そうした場所で危険ポイントやそれを踏まえた事故防止策について、車両係職員が説明する。昨年度は 9 人の職員が参加し 10 月に実施された。

②は、近隣の山城自動車教習所（綴喜郡井手町）に委託し、運転技能自動評価システム（Driving Doctor On/Off / オブジェ）を用いた研修を行うというもの（コラム参照）。昨年度は 11 月から 12 月にかけて 4 回実施され、計 24 人の希望者が受講した。自分では気づきにくい危険運転の傾向を客観的に知る「オブジェ」は職員に好評で、同研修が始まった 22 年度からの累計では 207 人が受講している。

③は、通勤災害予防のための研修で、人事課が主体となって年 1 回、実施している。京都府交通安全協会の指導員が講師となり、講義と DVD で交通安全の意識づけを行う。取り上げるテーマは、同市の通勤災害が多いバイク・自転車事故に関するものが中心。希望者に加え、通勤災害を起こした職員には人事課から参加を呼びかける。昨年度は 1

月に開催され 25 人が参加した。

宇治市の通勤災害は年間 3、4 件程度で推移していたが、25 年度に 8 件と倍増した。これを機に翌 26 年度からこの研修を始めた結果、同年度は 3 件と例年並みに戻った。市長公室人事課人事研修係主任の足立貴志さんは「1 時間半と短い講習ですが、充実した内容と職員には好評です」と語る。

人事課ではまた、通常の階層別研修に、新採用職員と同様、講義と実技による研修を盛り込むことも検討中という。

## 安全運転管理者、 事故経験者向け研修も

■対象…安全運転管理者等 安全運転管理者等、自動車の運転管理に指導的な立場の職員を対象とした



人事課人事研修係主任・足立貴志さん



宇治市宣伝大使「ちはや姫」を使った公用車に貼るステッカー

研修で、前出・山城自動車教習所から講師を招き、講義と実技により職員への指導方法を学ぶ。

26年度から始まった研修で、昨年度は1月に実施し、11人が参加した。

「安全運転管理者に任命される職員は異動によって変わっていくので、この研修を続けることで、管理者としてのスキルや意識を継承していければよいと考えています」と、池内さんは語る。

■対象…事故経験者 たとえ過失割合が1%でも、自らに過失がある事故を起こした職員に対しては、車両係の職員がマンツーマンで指導する研修を、随時実施している。

同じ状況で再度、事故を起こさないために、まず市役所駐車場を実技を交えて指導したうえで、当事者に実際に現場まで運転してもらいなが

ら、アドバイスする。26年度に試行的に実施し、昨年度に制度化した。制度化以降16人が受講しているが、再発者はゼロであり、その効果が期待されている。

**「やれることはすべてやる」**  
**事故を増やさないため**

このようにあらゆる対策を講じている宇治市だが、事故件数は年度当たり30件前後と横ばいの状態が続いている。

ただ、若年層の運転技量の低下を考えると、対策を講じていなければ、事故はさらに増えた可能性もある。

「目標はあくまで、交通事故ゼロです。ただ現実には、事故件数を減らすことは本当に難しいので、最低限、増やさないようにしたい。そのためには、『やれることはすべてやる』というスタンスで臨んでいきたい」と、池内さんは車両係員全員の思いを語る。

その言葉どおり、昨年度は多数の新規取り組みを始めたが、それらが今後、どのような効果をもたらすのか、注目されるところだ。

column

◆ 運転技能自動評価システム Driving Doctor Objet (オブジェ) について



山城自動車教習所・瀬川誠さん

教習所交通教育センター R-ism Lab. (リズムラボ) センター長の瀬川誠さん。ビデオカメラで撮影した動画で指導する方法もあるが、どの時点で安全確認しているかの把握などオブジェより不正確なうえ、自分の顔が映った動画を見せられながら欠点を指摘されるため反発する人もおり、なかなか納得しても

らえないという。オブジェは動画よりもシビアに運転行動を示すが、納得感があるためか、受講者同士で互いの運転行動について議論、論評し合う姿も見られるとのこと。

オブジェは、現在、全国の約50の自動車教習所をはじめ、タクシー、バス事業者などで導入されている。平成21~26年度には国土交通省の「自動車事故対策費補助金交付事業」の対象だったため、普及が進んだ(150万円ほどの初期導入費用が約半額になる)。受講料は、この補助金の有無やオブジェの受講者数/稼働率などで教習所により異なる。

運転技能自動評価システム(オブジェ)は、NTT、KDDIなどが出資する株式会社国際電気通信基礎技術研究所(京都府相楽郡精華町)と山城自動車教習所が共同開発した、安全運転指導用ツールである。

運転者の頭部、右足つま先と自動車本体に超小型センサーを装着。実際に走行しながら「交差点での安全確認」「ブレーキとアクセルどちらに右足を置いているか」と、「走行速度・道路上の位置情報」のデータを同時に記録し、グラフ化する。図からわかるように、運転行動が正確に、しかもわかりやすく「見える化」され、運転者がどの程度、潜在的な危険を予測しているかも推定できる。実際の評価は、運転行動のあらゆる要素が含まれ、運転者の癖も出やすい交差点を走行しデータをとって行く。何カ所かの交差点をモデルコースに設定し、予め指導員が模範走行したデータをプログラミングして必要最小限の事故予防動作の基準を定義する。その基準からどのくらい離れた運転行動をしているかによって、コンピュータが自動的にA~Eの5段階で評価する。

「実際には漫然運転している人でも、ご自分では「きちんと確認しているつもり、停止しているつもり」なんです。そんな人でも、このグラフを見せれば、漫然運転が一目瞭然なので、すんなり納得してくれます」と語るのは、オブジェの開発に当たった山城自動車

図 オブジェでグラフ化された運転行動の例

